

元興寺の境内に作られた奈良町

元興寺を中心とした奈良町は奈良の下町と呼ばれ、狭い路地や伝統的な建築物など、昔の面影を残す地域である。しかし、そのような古めかしい雰囲気とは裏腹に、住宅や商店は思ったほど古くはない。奈良市は1200年以上前から存在しているが、奈良町は16世紀後半まで元興寺の一部と考えられていた。

現在は数棟の伽藍が残るのみだが、かつては33ヘクタール（0.33平方キロメートル）の広大な敷地に、多くの堂、寮舎、塔があった。その広大な敷地と建物は、700年代後半から何世紀もの時を経て失われていった。奈良から京都に都が移され、朝廷は元興寺を含む奈良の寺院への資金援助を徐々に打ち切っていった。その結果、南北の農地を明け渡すことになり、講堂や金堂などの建物は荒廃していった。

その結果、元興寺は見る影もないほどになってしまったが、寺の中心的な建物は残った。しかし、浄土宗の信仰を中心に、元興寺は存続することができた。1244年には、千手観音曼荼羅を見に来る浄土宗の信者のために極楽堂と禅室が建立された。

しかし、1451年秋、伽藍のほぼ全域が焼失する大火災に見舞われた。この火災は、怒った農民が債務救済のために奈良に押し寄せたことに端を発している。農民が暴動を起こし、家々に火を放ったため、寺にまで火が及んだ。元興寺の中心的な建物は失われ、禅室、極楽堂などの主要な建物がわずかに残っただけであった。それでも寺は猿楽（現代の狂言および能楽の前身）の上演で生計を立てていた。

この頃、元興寺は3つの寺に分かれた。元々あった伽藍の大半を焼失し、西、東、東南の三ヶ所に分かれていた。そして、それぞれの伽藍は、仏像を見に来る参拝客に支えられて、独立して運営されていた。北側の禅室と極楽堂には、智光曼荼羅や聖徳太子の木像など、注目すべき仏像があった。西小塔院には仏舎利が安置され、南東の観音堂には十一面観音菩薩像と五重塔が安置されていた。五重塔と西小塔院は後に焼失したが、東大寺と西大寺の末寺として現存している。

最終的に、元興寺の敷地を狭め、都市化の道を開いたのは、財政難や農民一揆ではなく、政変であった。戦国時代（1467–1568）末期、足利幕府が織田信長（1534–1582）によって倒されると、元興寺は、その周辺の土地において朝廷から与えられていた権利を剥奪された。その後、その土地に住居や店舗などの開発が加速していった。17世紀初頭には、奈良町の形成が本格的に始まった。

奈良町の歴史は、村井古道（1681-1749）という理髪師であり、外科医、郷土史家でもある人物が、元興寺周辺に関心を持たなければ、失われた可能性が高い。彼は、この地域の新しい町並みの多くが、1573年から1592年の間に作られたことを突き止めた。この説は、後に発掘調査によって確認された。元興寺の現存する建造物の周辺を考古学的に調査したところ、1550年代の井戸跡、ゴミ捨て場、寺院の石造りの基礎などが多数発見された。また、1451年の大火で焼失した建物の礎石を埋め、その上に新しい住居や店舗を建てるといふ、元興寺の建物がどのように埋もれていったかを示す証拠も発見された。この礎石の埋没は、7世紀以来の元興寺の真の終焉を意味するものであった。

現在は奈良町として賑わっているが、今御門町、下御門町、脇戸町は門前町、辻之内町（塀の中の町という意味）というように、寺の名前に由来する地域である。元興寺の建物の多くは失われたが、その歴史は今も生きている。